

中国農村における家族単位の経営請負制（「大包乾」） 下での家族経営について

——山東省陵県鄧集郷南張村の調査分析——

座 間 紘 一

〈目 次〉

はじめに

1、陵県鄧集郷南張村の概況

2、家族経営の分化，多様化の状況

(1) 生産手段の所有，分配状況

①耕地

②土地以外の主な生産手段

③養鶏，畜産

(2) 経営の分化，多様化の状況

①耕種部門

②養鶏部門

③畜産部門

④その他の経営部門

(3) 多角化と所有の関係

(4) 貨幣経済化の状況

(5) 就業状況

まとめにかえて

はじめに

この調査分析は，1984年11月に実施した山東省農村調査の一部である。こ

の調査期間中私はここで分析する陵県鄧集郷南張村と別の機会に検討する予定である昌邑県青郷郷の1村落で簡単な全戸調査を実施することができた。

方法は次のようになされた。即ち、事前に11項目ほどの簡単な調査項目を印刷し、調査を按配し、調査期間中私を案内してくれた県農業部副部長に依頼し、彼からいくつかの媒介をへて村青年団員に依頼され、彼らによって実施された。昌邑県の場合も同様な手順によって、郷小学校の1教員によって実施された。私は直接調査員に会って説明しておらず、同行した県や村の職員に説明したにとどまる。調査は陵県では10日間の私の調査期間中には完了せず、約1ヶ月後に私の手もとに調査表が届けられた。南張村での私のヒアリングは11月2日におこなわれ、南張大隊(村)書記張文臣氏から、主としてあらかじめ提出しておいた調査項目について説明をうけた。私のヒアリングと全戸調査をあわせて1つになるものであるが、相互がばらばらにおこなわれ調整されていないことから次に述べる地域の選定と調査項目との適合性に問題をのこすものとなった。

地域の選定については、当初私は山東省全体で3ヶ所、内分けは先進的地域、中進的地域、後進的地域かつ都市近郊、山間地域、中間地域を考慮してもらう希望を出していたが、基本的には先方まかせであり、必ずしも希望にそったものとはなっていない。手続きとしては、指導教官である山東省経済センター季星如主任、山東大学経済系白施義講師が私の希望を聞いた上で実施地域、期間の案を決め、山東大学外事弁公室が山東省を介して当該地域に依頼し、承諾されたという経緯をへている。

陵県については中国共産党第11期生3回中央委員会での政策転換以後、急速に生産が発展し、生活が豊かになった地域の事例として調査地域に加えられたもようである(陵県の地域的特徴については拙稿「中国農業の現状と問題—山東省農村調査ノート—」『東亜経済研究』第49巻第3・4号、1985年6月、を参照されたい)。

さて、本調査分析の目的であるが、私自身のヒアリングと調査表への回答をもとにして、南張村において家族単位の経営請負制(「大包乾」)への転換

をつうじて、世帯レベルでの経営の多様化、分化、労働力需要の変化、過剰労働力の析出状況を事例的に検討し、それをつうじて人民公社解体以後の社会主義体制下での個別経営のあり方、および今後の方向性について検討することである。

分析の方法としては、第1に生産手段の私的所有と個人的利用がどのようにすすんでいるか、集団的所有と集団の利用はどの分野で残されているか、利用の集団的諸規制の経済的性格はどのようなものかを明らかにする、第2に、生産手段の所有・利用関係をふまえて経営の私的性格の進展状況を明らかにし、集団的統一計画＝規制の分野、内容と個別経営との相互規定関係、方向性を検討する、第3に、個別経営の多様化、分化の現状を把握する、とりわけ労働力需要の変化と過剰労働力の就業形態の変化を検討することにより、地域の就業構造、地域的分業の展開のあり方を検討する。

以上をつうじて設定した課題の解明にせまろうとするものであるが、調査地域と設定された問題意識との適合性が不十分であったり、調査項目や設問の仕方が不適切であったり、回答の記入が不十分であったりするために問題の本質に十分にせまりきれていないきらいがある。

別稿で同様なテーマでもう一つの全戸調査地の昌邑県青郷郷について分析する予定である。両者をあわせて、この問題についての検討を深めたいと思っている。

1、陵県鄧集郷南張村の概況

1984年11月3日私は本村の張文臣書記にインタビューをおこなった。これにもとずき南張村の経済概況を述べる。

戸数は65戸うち農業戸62戸である。非農業戸といっても妻子は農民人口でのちにのべる「口粮田」、「責任田」は分配されている。

総人口は287人で、男144人、女143人である。年齢別構成をみると第1表のようである。産児制限のためさすがに5歳以下は少ない。

学歴は高級中学卒(日本の高等学校程度) 8, 初級中学(同じく中卒) 25,

第1表 南張村人口構成男女・年令別

	男	女
才以上 才以下 0～5	5	6
6～10	12	12
11～15	23	14
16～17	13	6
18～20	14	19
21～30	25	21
31～40	22	26
41～50	12	10
51～55	8	7
56～60	2	7
61～	8	15
計	144	143

〔注〕 整労働力：男子18才～55才、女子18才～50才
 半労働力：男子16～17 56～60
 女子16～17 51～55

小学33であり、何らかの技術を有する者45、養鶏技術を有する者30、その他に修理工、レンガ工などがいる。

耕地は540^ム畝（36ヘクタール）、林地11畝（73アール）、人口の割に土地が少ない（1人当り耕地12.5アール）。食糧・綿作地は人口1人当り1.83畝（12.2アール）である。

主要作物は綿花、小麦、大豆、とうもろこし、コーリャン、蔬菜で、うち中心は綿花、小麦である。

副業としては養鶏（集団および個人）、綿花・食糧加工、「扒鶏店」（集団経営＝県域での加工・直販店）、養豚などである。とくに養鶏は本村の中心的副業部門であり、本村は養鶏専業村として振興されている。

非農業部門は未発達であり、さしたる郷鎮企業もないが、工副業部門として集団の養鶏（採卵、孵化）、扒鶏店、個人の綿花加工、製粉、電機機具修理、理髪、豆腐、編物などがあり、就業者は55人である。

本村の最近の生産発展状況は第2表の如くである。'83/'80で小麦の単位面積当り収量は6.6倍、とうもろこしは1.6倍、綿花は2.1倍といずれも大きく伸び、山東省の平均と比較すると80年では小麦0.49、とうもろこし0.68、綿花1.21と綿花を除けば省平均の半分前後であったものが、83年では各々2.0、1.1、1.9ととうもろこしが省平均であるほか、小麦、綿花は2倍前後の収量に上昇し、この間の急速な増大を示している(第3表)。耕作面積では小麦・とうもろこしはやや減少したのに対し、綿花は220畝から300畝へ1.3倍に増加している。これはこの間の綿作奨励等の反映でもある。養鶏、養豚については82年以後急速に拡大し、とりわけ84年はめざましい。このように本村は陵県の他の村々と同じく1970年代までは食糧生産に特化し、しかも年収が低い後進地域であったが、綿作奨励と農業政策の転換、生産責任制の普及によって急速に年収、所得とも上昇し、それを基礎に養鶏、畜産分野への進

第2表 陵県鄧集郷南張村の生産発展状況

(年)	小麦				とうもろこし				綿花				1人当り平均		
	単位面積当り収量(斤/畝)	耕作面積(畝)	総生産高(畝)	人口1人当り収量(斤/人)	単位面積当り収量(斤/畝)	耕作面積(畝)	総生産高(万斤)	人口1人当り収量(斤/人)	単位面積当り収量(斤/畝)	耕作面積(畝)	総生産高(万斤)	人口1人当り収量(斤/人)	分配収入(元/人)	養豚(頭)	養鶏(羽)
1980	136	220	3	105.6	350	220	7.7	271	117	220	2.75	91	231	80	200
1981	275	200	5.5	193.7	410	200	8.2	288.7	154	300	4.52	129	415.4	95	200
1982	750	180	13.5	475.8	465	180	8.4	295	187	325	6.00	211	576.2	105	500
1983	900	200	18.0	633.8	562	200	11.2	395	250	300	7.50	261	828	135	5,400
1984														150	20,000

第3表 山東省平均単位面積生産量(斤/畝)

	小麦	とうもろこし	綿花
1980	278	514	97
1981	331	481	96
1982	329	522	96
1983	446	499	109
1984	449	640	134

〔出所〕『中国農業年鑑』1981～85年版

出をはかりはじめたといえよう。

2、家族経営の分化，多様化の状況

(1)生産手段の所有，配分状況

①耕地：耕地の各戸毎の請負は1980年に実施された。分配規準は自家用食糧耕地（「口粮田」）は家族員1人当り0.7畝（=4.7アール），綿花栽培耕地は同じく家族員1人当り1.0畝（=6.7アール）であり，1980年分配時には残りの40畝（=2.7ヘクタール）を労働力のある農家に配分した。

「口粮田」の配分状況をみると，第4表のようである。調査表より「口粮田」を配分されていないと推定される人をひろってみると，①陵県第5中学教師（男・35才）—この家では妻が戸主で農民であり，長子（18才）と農業に従事している，②陵県水利局橋涵隊の労働者—この家では妻が戸主で農民であり，家族は農業従事者である，③集団商業従事者（正式名称不明）—この家は母と本人（長子），と四女，二子の4人家族で本人のみ非農業人口の合計3人である。これらの人々はいずれも恒常的労働者である。逆に次のよ

第4表 1戸当り農業人口と「口粮田」分配との相関(戸)
農業人口(非農業人口を除く) (人)

人	1	2	3	4	5	6	小計
0.7	1						1
1.4		5					5
2.1			14				14
2.8			1	8	1		10
3.5				1	10	1	12
4.2				2	13	9	14
4.9					1	4	5
5.6					1	1	2
6.3						1	1
7.0						1	1
小計	1	5	15	11	16	17	65

うな非農業従事者には「口粮田」が配分されていることが推測される。「自産自銷」の商人、個人営業の電気機具修理業、村の運輸業の請負(「承包」)、当村集団養鶏場の従業者、当村建築隊のレンガ工、当村からの製粉請負、同綿打ちの請負、同飼料加工請負、当村の書記、会計などである。「口粮田」分配の規準は農村住在でも農民戸籍の有無にあるようである。

80年分配時以後に生まれた人口については分配されているようであるが、死亡した者についてのとりあつかいは不明である。

第5表 家族構成と「口粮田」分配情況

分配基準からの差異	戸数	番農 号家	家族員数	労働力数	備考
+ 2.8 畝	1 戸	③⑤	6 人	5 人	
+ 2.1	2	①⑨ ⑥③	5 6	3 4	現大隊副大長
+ 1.4	4	① ②③ ⑥⑩ ②③	6 5 4 4	5 4 4 2	大隊党支部書記 旧幹部(幹部歴8年) 大隊会計
+ 0.7	7	②② ②⑨ ③⑨ ③④ ③⑧ ⑤③ ⑤⑨	6 6 6 4 3 5 6	5 2 5 2 2 4 4	大隊民兵隊長 旧幹部(幹部歴6年)
- 0.7	2	①② ②①	6 5	4 5	個人商業従事者1 養鶏従事者1

しかし、第5表にみるようにいくつかのバラつきがあらわれており、家族員数が多くなるにつれて1人当りの「口粮田」面積が拡大している。規準分配量を最も大きく上まわるのは基準よりも2.8畝多い農家であるが、その家族構成は戸主48才、妻46、長子24、同妻24、二子22、三子20と6人家中6労

働力と労働力が多い。次に2.1畝多い農家は2戸で、うち1戸は戸主が39才で副大隊長、母75才、妻39、長女19、長子15(高中)で労働力は3人であり、他は6人家族で戸主は54才、妻50、4子20、大女18、5子16、6子13で5人が整半労働力である。0.7畝多い農家は7戸であるが必ずしも労働力が多いとはいえない。逆に基準より少ない農家は2戸でいずれも0.7畝少ないが、1戸は家族員の1人が個人商業に従事し、他の1戸は家族員の1人が養鶏に従事している。しかし、養鶏農家は他にも多く、家族員が養鶏に従事しているからといって「口粮田」の配合が少ないとはいえない。

家族内の農業労働力数と1戸当り「口粮田」の相関をみたのが第6表である。当然かなりの相関はあるが、家族員数に比較すれば相関度は低い。

第6表 1戸当り「口粮田」分配面積と家族農業労働数との相関(戸)
全半農業労働力(全・半各1と数える)(人)

人 畝	0	1	2	3	4	5	6	小計
0.7	1							1
1.4	3	1	1					5
2.1		3	11					14
2.8			6	2	1	1		10
3.5			6	2	3	1		12
4.2				7	5	1	1	14
4.9			1	1		2	1	5
5.6				1		1		2
6.3					1			1
7.0							1	1
小計	4	4	25	13	10	6	3	65

綿花栽培耕地(「責任田」)について家族間でどのような分化があるかを調べてみよう。綿花は本村の中心的作物で、当時「統一買付」物資として、村当局は国家から下達された買付量を保証すべく、各農村に対し作付面積を下達していた。各農家への耕作面積の分配には「口粮田」とことなり多様な要因が入っているようである。

まず1戸当り「責任田」面積と農業人口の相関をみると第7表の如くである。農業人口1人当り1畝を規準としているが、農業人口の多い農家ほど規準からの偏差が大きい。

第7表 1戸当り「責任田」面積と家族員数(農業人口)との相関(戸)
農業人口(人)

人	1	2	3	4	5	6	小計
1	1						1
2		3	1	1		1	6
3		2	7	3	2		14
4			7	2	4	3	16
5				5	4	5	14
6					3	1	4
7						3	3
8					1	4	5
9						2	2
10							
小計	1	5	15	11	14	19	65

偏差の大きい農家の家族構成をみると次のようである(第8表)。

標準より2～3畝多い7戸は農業労働力が4人以上で比較的労働力が多い農家である。標準より2～4畝少ない7戸をみると戸主のみが男子であれば女性ばかりの農家が3、サービス業1、養鶏2、不明1である。ここには労働力の多寡、他産業へ従事情況などが考慮されているようである。

農業労働力数との相関をみると第9表の如くである。ばらつきはあるが相関度は高い。ここで特に差の大きい4戸をとり出すと第10表の如くである。他産業への恒常的勤務2、男子労働力なし1、個人副業1である。

家族員数割で配分した耕地を除いた残りの耕地は、私の聞きとりでは労働力に応じて分配したとなっているが、必ずしもそうではない。

結局耕地に関しては、「口粮田」、「責任田」とも家族員数との相関がきわめて高く、両者の間では「責任田」よりも「口粮田」の方が高い。このこと

第8表 家族構成員1人当り「責任田」の標準からの
偏差と家族員数および労働力数

標準との差	戸数	農業番号	家族員数	労働力数	その他
畝 + 3	戸 3	③ ③9 ⑤3	人 6 6 5	人 4 5 4	1人は個人商業従事 旧幹部(幹部歴8年)
+ 2	4	① ③5 ⑤9 ⑥3	6 6 6 6	5 6 4 4	1人は建築隊レンガ工
- 2	6	⑨ ⑳ ㉓ ㉔ ㉕ ⑤5	4 5 5 6 6 6	2 5 3 5 4 3	戸主は個人の電気機具修理業 養鶏 党支部書記、養鶏 戸主以外は全部女性 〃 〃
- 4	1	⑪	4	2	〃

第9表 1戸当り「責任田」分配面積と家族農業労働力数との相関(戸)
全半農業労働力(人)

人 畝	0	1	2	3	4	5	6	小計
1	1							1
2	3		2		1			6
3		2	10	1		1		14
4		2	6	4	2	2	1	15
5			6	5	3			14
6			1	2	1			4
7				1		1		3
8					2	2	1	5
9					1	1	1	2
10								
小計	4	4	25	13	10	7	3	65

第10表 労働力数と「責任田」分配との差が大きい農家

農家番号	労働力数	責任田	備考
④5	4 (男 ₂ 女 ₂) ^人	2 畝	長子は集団商業従事
②1	5	3	養鶏(個人)
②8	5	4	養鶏(個人)、1人大隊養鶏場勤務
②2	5	4	労働力男2、女3

は食糧の各戸単位での自給を前提条件にして地域経済および各戸の経営が営なまれていることを意味する。このことは70年代までの食糧中心、地域封鎖的自給政策や商品作物である綿花の商品化のあり方、地域における企業の未展開とも関連する。

④土地以外の主な生産手段：集団所有はトラクター2，揚水ポンプ3，自動車1，モーター1である。個人所有は第11表の如くである。

第11表 個人所有の生産手段

牛(又はろ馬)		荷 車		犁 (鋤子)		トラクター		自 動 車	
2頭	7戸	1台	29戸	1台	11戸	1台	1戸	1台	1戸
1	42	なし	36						
なし	16								

牛(ろ馬)は全戸数の85%，荷車は45%，犁は17%が所有している。トラクター，自動車は輸送手段である。調査表にみるかぎり役畜の所有割合は高いが犁の所有数は少ない。耕作は主として畜力，手労働に依拠している。畜力，犁に所有，非所有の差がみられる。集団のトラクター，製粉機，綿打ち機は集団から個人へ請負に出されている。

④養鶏，畜産：豚飼養は養豚積肥の必要性から全戸数の86%の農家がおこなっている。多くは3頭以下の片手間的飼養だが，5戸が8頭以上の多頭飼養であり，一定の分化がみられる(第12表)。

鶏は65戸中60戸が飼養している。うち19戸は100羽以上の多頭羽飼養である。養鶏は各世帯の間で最も差の大きいものである(第13表)。

その他の小動物は第14表のようである。

以上のように豚、鶏において一定の専門的経営が形成されている。

しかし、畜産相互間では4種類の飼育は全戸数の21.5%、3種類が52.3%、2種類が20.0%、と多種類の同時飼育がめだち、一種類に専門化していない。平均的農家像は牛1頭、ふた1～2頭、鶏10数羽というところで、養鶏100羽以上飼養戸でも牛や豚がそれがためにへることはなく、豚10頭以上でも同様のことがいえる（第15表）。

第12表 豚飼養農家数

豚飼養頭数	戸数
0頭	9戸
1	25
2	19
3	7
8	1
10	1
12	2
13	1

第13表 鶏飼養農家数

鶏飼養羽数	戸数
0羽	4戸
1～9	15
10～19	21
20～49	4
50～99	1
100～199	17
300～399	1
950	1
?	1

第15表 飼養家畜・家禽種類別農家数

牛+豚+鶏+ α	14戸	21.5%	
牛+豚+鶏	31	47.7	} 52.3
牛+鶏+ α	1	1.5	
豚+鶏+ α	2	3.1	
牛+豚	1	1.5	} 20.0
豚+鶏	9	13.8	
牛+鶏	3	4.6	
にわとり	1	1.5	
なし	3	4.6	

第14表 小動物飼養農家数

うさぎ	6戸
やぎ	9
羊	1
鴨	1
鳩	1

[注] α とはうさぎ、やぎ、羊、鴨、をさす。

牛については第11表にみたとおりだが、非飼養戸は非農業従事者、労働力のない家、養鶏専業戸(9500羽飼養)などである。

結局、非農業部門への就業を除けば、農業経営において最も大きな格差をうみ出すものは養鶏、畜産部門をもつか否かである。

(2)経営の分化、多様化の状況

①耕種部門：本地区の主要作物は小麦—とうもろこしの2毛作および綿花である。経営形態は「いくつかの統一の下での経営各戸請負(「几个統一大包乾」)がとられている。陵県人民政府副県長石連芳氏の話では、いくつかの統一とは、(i)栽培計画は国家の指令性および指導性計画にもとずき、生産隊が安排する。作目、品種毎の作付面積、作付耕地まで決められ、農民は栽培計画に従って耕作しなければならない。(ii)主要な管理措置、機械耕耘、機械播種、灌水、追肥、病虫害防除は生産隊が統一して行なう。しかし各生産隊の物質的基礎がことなるため多少ことなる。(iii)農業水利施設の建設、使用、管理、(iv)大中型農機具の利用、管理、(v)国家や集団の事業への義務労働の安排と使用、である。

「口粮田」にしる「責任田」にしる土地分配にあずかった世帯は上の制約下で経営することになる。(i)についてはこの村では作目が少なく、耕地の形状も平坦で1ヶ所に集中しており、「口粮田」と「責任田」は別に区分されていた。品種については綿花は「魯綿一号」に統一されていたが、来年からは新品種を導入するという。(ii)主要農作業の統一についてみると、トラクターは集団有2、個人有1、であり不足している。役畜は85%の世帯、犁は17%が所有しているという事情を考えると耕耘は次第に個別的になりつつあると思われる。しかし水利、施肥、防除は統一的におこなわれており、このため労働投下量の多くが集団的に規制されたものになっている。(iii)陵県の水利体系はきわめて大型で黄河をはじめ周辺の大中小河川を総合的に治水利用している。これら水利体系は1984年の調査時点ではほぼ完成していたが、その維持、管理にも膨大な労働力が必要と思われる。このための出役も統一的におこなわれる。更に収穫や作付時期の労働力需要のピークを考慮するとや

はり多くの労働は様々な程度で土地に縛りつけられていると考えられる。

さて、耕地の分配については世帯間でいくらかの格差が発生しているが、収量ないし収益面ではどうか。

耕地面積規模別に1畝当りの耕種業の純収入の比較をおこなってみると第16表の如くである。耕作面積が大きくなるにつれて単位面積当りの純収入は大きくなるとはいえない。むしろ逆の傾向さえうかがわれる。小麦、綿花の収量について同様な考察をすところでも同様な結論がひき出せる(第17, 18表)。小麦、綿花ともどちらかといえば中規模の世帯に単位面積当りの収量の大きいものがある。畜力・手労働、養豚積肥を中心とする生産力にあっては省力化よりも「精耕細作」であり、入念な肥培管理が効力を発揮する。ここにおいては耕作面積上での規模の優位性は顕現していないと考えられる(第19表)。

④養鶏部門：本村は陵県の養鶏専門村に指定されており、集団養鶏場で孵化、採卵、肥育をおこなうとともに陵県県域に扒鶏店を出している。

本村張文臣書記からの聞きとりによると、養鶏技術を持つ者は30人で養鶏戸の最大規模は1,800羽で、500羽以上10戸、100羽以上は25戸あり、100羽以上は養鶏専門戸であるという。養鶏も83, 84年に急速に発展したものである。技術面では天津の華津畜牧連合会社の指導をうけ、毎月1度技術指導に来て

第16表 耕地面積規模別1畝当り耕種業純収入(戸)

	~200 ^{元未滿}	200~250	250~300	300~350	350~400	400~
0~2 ^{畝未滿}		1				
2~4	1	1	1			1
4~6		6	5	2	2	
6~8	2	5	4	4		1
8~10	1	7	6	1	1	
10~12		3	3			
12~	1	3	2			
小計	6	26	21	7	3	2

もらうという。村内でも防疫員、飼料員を各1人養成した。販売面では鶏卵は一部を県内に供給する他、大部分は天津の華津畜牧連合会社に販売し、1斤の鶏卵につき2.5斤の飼料を供給される。肉鶏については一部は陵県県城の扒鶏店(本村直営)で販売する他、残りは華津畜牧連合会社に1斤=1.35

第17表 作付面積規模別小麦1畝当り収量(戸)

	斤以上 斤未満 400~500	500~600	600~700	700~800	800~900	900~1,000	1,000~
0.7 畝					1		
1.4			1	4			
2.1	1			8	4		1
2.8			1	5	2	1	1
3.5				8	4	1	
4.2			1	6	4	1	
4.9				5	1		
5.6					2		
6.3				1			
7.0~				1			
小計	1		3	38	18	3	2

第18表 作付面積規模別綿花1畝当り収量(戸)

	斤以上 斤未満 400~450	450~500	500~550	550~600	600~650	650~
1 畝					1	
2		6				
3		5	1		7	1
4		7		3	5	
5		3	2	3	1	5
6		1	1	1	1	
7		1	1	1		
8			1	1	3	
9		1	1	1		
小計		24	7	10	18	6

第19表 耕作面積と耕種業純収入との関係(戸)

	1,000元未満	1,000元以上 ~1,500	1,500~2,000	2,000~2,500	2,500~3,000	3,000~3,500	3,500~
2 畝未満	1						
2 畝以上	3						
2~4	3						
4~6	2	6	6	2			
6~8		2	9	3	1		
8~10			6	5	4	1	1
10~12				2	2	2	
12~				1	3	2	1
小計	6	8	21	13	10	5	2

第20表 養鶏農家の養鶏飼養羽数と他の畜産との関係(84年11月飼養頭羽数)

養鶏	牛	豚	山羊	うさぎ	鴨	83年純収入	耕作面積	労働力数	家族員数	
羽	頭	頭	匹	匹	羽	元	畝	人	人	
950						7,500	5.1	1	3	
340	(ろ馬1)			10		3,500	11.2	6	6	
180	1	1				1,500	6.1	1	3	
150	1	8		5		1,200	9.5	3	5	集団副業1
150	1	3				1,200	13.6	5	6	
150	1	2				1,200	9.2	4	6	教師1
150	1					1,200	5.1	4	4	非農家(中 学教師)
150		3				1,800	7.9	3	5	大隊党支部 書記、林業
129	1	2				1,150	11.6	3	5	
120	1	3	5		5	830	15	6	6	建築隊レン ガ工1
120	1	2	6			750	11.6	3	5	
120	1	2				890	7.5	5	5	
120	1	1				1,800	9.2	3	4	集団養鶏所1
120		1				950	6.5	2	3	民兵隊隊長
100	1	12				520	14.3	4	6	
100	1	10				?	6.1	2	3	
100	1	2		3		950	6.1	2	3	
100	1	1				840	5.8	2	4	
100	1	1				1,050	5.8	5	5	

元で販売する。84年の養鶏の純収入は10万元に達する見込みである。技術、販売先、飼料供給面で華津畜牧連合会社と結びついて展開したことに本村の養鶏の特徴がある。84年11月現在では各飼養戸の幼鶏は集団孵化場が供給し、販売や飼料購入は集団がとりまとめておこなう。

紹介された専門戸の例では、300羽飼育し、84年の5ヶ月の採卵数28,800個、単位当たり0.25元、総収入は7,200元、飼料2,835元、その他を差引くと残りは3,765元になるという。

養鶏の規模の大きい世帯をピックアップすると以下の如くである。張書記の話とは異なり、500羽以上飼育1戸、100羽以上19戸である。83年純収入で見ると最高が950羽で7,500元ととびぬけて大きく、次いで340羽で3,500元、180羽で1,500元、150羽で1,200元前後、120羽で1,000元前後である。規模が大きくなるにつれて純収入も比例的に増大している。各戸の主な管理者をみると950羽飼育戸の管理者は本村の養鶏技術の先覚者でもあるが、全体としては女性が16人、男性3人である。養鶏飼養管理は主として女性によって担われている。養鶏専門戸といわれる世帯の多くは他の畜産、耕種においてもかなりの規模のものが多く、決して経営の分化、分業が基本的傾向とはいえない。問題はどのような世帯が養鶏部門に進出しようかであるが、養鶏の飼養管理技術の教育、普及、資金や資材の貸付や供給については陵県が優先的に便宜をはかり、いっそう多くの世帯が養鶏に進出するのを促しているようである。更に本村をモデルとして、近隣の村々への普及もはかられつつある。その意味では自生的というよりも、多分に政策的といえるものであるが、ききとりでは、張文臣書記が従来から養鶏をおこなっていた技術的基礎の上で積極的に拡大をはかり、天津畜牧連合会社との契約をとりつけたことが述べられた。

④畜産部門：畜産の純収入の高い農家（83年の純収入500元以上）を拾うと次の12戸である。うち7戸は鶏の収入も加算されている。

ここでの特徴は豚の飼養頭数が84年11月現在多くないことである。

記入もれないし、鶏の収入の高さによって畜産収入が高く記入されている

のであろう。豚飼養頭数の多い世帯の畜産収入は250～380元である。

豚多頭飼育といっても10頭前後では収入面で主要な経営部門になりえていない。

第21表 畜産経営状況

順位	農家番号	1983純収入	1984年11月現在飼養頭数, ()内は販売頭羽数					
			牛 頭	豚 頭	羊 匹	山羊 匹	免 匹	鶏 羽
1	㉓	750	1	3				
2	㉔*	601	1	2(2)	4(3)		5(3)	15(5)
3	㉕	600	1	2(2)				
4	㉖	580	1	3(3)				
5	㉗*	570		3(3)				14
6	㉘	545	2	2(2)		3(2)		8(8)
7	㉙*	540	2	2(2)				12(12)
8	㉚*	530	1	2(2)				25(25)
9	㉛*	520		2(2)				10
10	㉜*	520	1	2(2)				21(21)
11	㉝	510	1	2(2)		6(5)		120(5)
12	㉞	500	1	1				15

〔注〕 1) *印は鶏の収入が加算されている。
2) ()の販売羽数の記入のない世帯は、調査表のこの項目に記入のなかったもの。

第22表 豚の多頭飼育農家の畜産収入

順位	農家番号	飼養頭数(84年)	畜産収入(83年)	その他の畜産飼養状況				
				牛 頭	羊	山羊	免 匹	鶏 羽
1	㉕*	13(12)	300					8(8)
2	㉙*	12(10)	380	1				15(15)
3	㉛	12(11)	360	2				100(60)
4	㉞	10(9)	300					100
5	㉟	8(7)	250	1			5(3)	150

〔注〕 *印の世帯は鶏の収入が加算されている。

牛は役牛として飼育されている。羊、山羊、兎などの小動物も多少は飼養されているが片手間の家計補助的意義しか持たないと思われる。

㊦その他の経営部門：林業（第23表）：4戸のみがかなりの収入をあげている。他の61戸は林業収入の記入はない。世帯番号㊦はエンジュの枝1,300kgの販売収入と考えられるが、この世帯は家族員4，農業労働力2，耕地面積5.8畝，林業の他，農業収入1,652元，畜産270元（豚飼育1（販売1），羊5(4)，鶏7(7)）で林業に特化しているわけではない。㊢は戸主が大隊党支部書記で家族員数5，農業労働力3，耕地面積7.9畝，農業収入1,810元，養鶏収入1,800元（150羽飼育）である。

第23表 林業収入状況

順位	農家番号	1984年純収入 (元)	樹木種類栽培本数, ()販売本数			
			梧樹(アオギリ)	槐樹(エンジュ)	楊樹(カワヤナギ)	
1	㊦	850	本	50 本	20 本	(エンジュの枝2500斤)
2	㊢	750	20	15		
3	㊤	500	1100 (600)			
4	㊨	240	1087 (580)			

個人営業（第24表）：電気機具修理が特殊技能を有しているが故にきわめて大きな収入を得ている。製粉・飼料加工は大隊の機械を請負っているのだが、その独占的地位の故に相当の収入をえている。その他に個人商人、木工、運輸が各1戸あるのみだが収入は大きくない。また、電気機具修理、木工を除いて、かなりの耕作、畜産をも兼営している。

第24表 個人営業状況

順位	世帯番号	純収入	業種(従事者)	その他(元)		
				耕種	畜産	養鶏
1	㊩	4,500元	電気機具修理(世帯主)	1,300元	52元	
2	㊦	2,600	大隊の製粉・飼料加工(請負)(世帯主)	2,600	250	1,200
3	㊤	650	木工(世帯主)	1,950	275	
4	㊢	600	個人経営(世帯主)	2,700	450	
5	㊨	520	運輸(請負)	3,100	250	

集団(国営)企・事業就業者(第25表)：合計9名だが、うち3名は非農家人口である。その他は当大隊の企・事業に勤務している。大隊営企・事業勤務者の方が報酬が高い。その上「口粮田」,「責任田」の分配を受けている。非農業人口の勤務者は「口粮田」,「責任田」の分配を受けてはいないが、家族員は受けている。大隊営企・事業従事者は農民として耕種,畜産,養鶏でも比較的多くの収入をえている。これら就業者は青・壮年の男子労働力だが養鶏に比して収入は多くなく,就業の場も限られている。

第25表 集団(国営)企(事)業就業者

順位	世帯番号	純収入 (元)	業種(就業者・才)	その他業種所得(元)		
				耕種	畜産	養鶏
1	㊸	1,200	建築隊レンガ工(2人二・22、三男・20)	2,500	1,580	
2	㊹	850	集団商業(三男・20)	1,200		
3	㊺	720	大隊養鶏場(長男・21)	2,125	380	890
4	㊻	720	〃 (四男・20)	3,200	580	450
5	㊼	666	教師(長男・21)	2,300	420	1,500
6	㊽*	560	集団商業(供銷社)	920	185	
7	㊾*	546	中学教師(男・35)	2,000	1,200	
8	㊿*	540	水利局従業員(男・46)	1,850	190	

[注] *印は非農業世帯

(3)多角化と所得の関係

世帯当り所得は家族労働力数とよりも家族員数との比例関係が強い(第26, 27表)。

第28表に示すように総所得の高い世帯ほど多就業であり,とりわけ養鶏を営むものが多い。逆に総所得が下位のものほど就業種類が少なく,最下層のグループは耕種と若干の畜産で,家族員数,労働力数とも少なくなる。所得格差についてみると,上位10位までの平均は5,696元,下位10位では1,189元で4.8倍の開きがある。世帯員1人当り平均で同様な比較をすると上位10位までの平均は1,333元,下位10位までは402元で3.3倍の開きがある。402元は山東省農民家庭収支サンプル調査にみる平均農民1人当り純収入が404元

(1984年)であることを考えると低くはない(第29表)。しかし上層と下層とではかなりの開きがあることは否定できない。

(4)貨幣経済化の特徴

本村の商品化は綿花、養鶏、畜産など商品化部門が大きな比重を占めることを考えるとかなりの高さの農産物商品化率になると思われる。しかし、生産財所有面でみると役畜(牛1頭の購入価格250~350元)を除いて購入は高

第26表 家族員数別世帯純収入分布(戸)

世帯当り純収入(元)

家族員数(人)	世帯当り純収入(元)										小計
	1,000未満	1,000以上 2,000未満	2,000 3,000	3,000 4,000	4,000 5,000	5,000 6,000	6,000 7,000	7,000 8,000	8,000 9,000	9,000 以上	
1	1										1
2	2	1	2								5
3		7	3	2						1	13
4		3	5	3	1	1					13
5		1	4	5	3		1				14
6		1	7	5	3	1	1				18
7			1								1
小計	3	13	22	15	7	2	2			1	65

第27表 家族労働数別世帯純収入分布(戸)

世帯当り純収入(元)

労働力数(人)	世帯当り純収入(元)										小計
	1,000未満	1,000以上 2,000未満	2,000 3,000	3,000 4,000	4,000 5,000	5,000 6,000	6,000 7,000	7,000 8,000	8,000 9,000	9,000 以上	
0	3	1									4
1		1	1	1						1	4
2		7	10	5	1	1					24
3		2	6	3	2						13
4		2	2	3	2		1				10
5			2	2	2						6
6			1	1		1	1				4
7											
小計	3	13	22	15	7	2	2			1	65

第28表 多角化と所得の関係

世帯員1人当り所得	総所得に占める耕種業所得割合別分布()内は養鶏農家									
	戸数①		うち養鶏農家※②		①/②	75%以上	50~75%	25~50%	25%未満	小計
	戸	%	戸	%	%					
100元未満 元以上										
100~200										
200~300										
300~400	3	4.6			0	1	2			3
400~500	16	24.6	2	9.1	12.5	10	4(1)	1	1(1)	16(2)
500~600	7	11.8	1	4.5	14.3	5	2(1)			7(1)
600~700	14	21.5	3	13.6	21.4	8	5(2)	1(1)		14(3)
700~800	6	9.2	2	9.1	33.3	5(1)	1(1)			6(2)
800~900	6	9.2	6	27.3	100.0		6(3)	6(3)		6(6)
900~1,000	3	4.6	2	9.1	66.7	1	2(2)			3(2)
1,000~	10	15.4	6	27.1	66.0	3	2(2)	3(3)	2(1)	10(6)
合計	65	100.0	22	100.0		33(1)	24(12)	11(7)	3(2)	65(22)

[注] ※養鶏農家とは調査時点で100羽以上飼養している農家をさす。

第29表 山東省農民家庭収支サンプル調査

	1983	1984
平均農民1人当り純収入	368 ^元	404 ^元
生活支出	264.42	287.24
うち生活消費財支出	260.58	282.94
うち食品	134.16	149.19
衣料	34.60	34.62
住居	40.36	46.11
文化サービス支出	3.84	4.30

[出所] 『中国統計年鑒』1984、1985中国統計出版社

くない。ここには商品化の性格が反映していると思われる。第1に綿花は1984年当時第一類の統一買付物資であり、国家計画が下達され、大隊は作付計画、各戸への配分、耕作地を統一的にきめ、主要農作業は統一的におこなうことによって、各世帯が独自に、個別的に投資し、作業する範囲が小さいことである。肥料にしても計画の達成とかかわらせて供給されることになっ

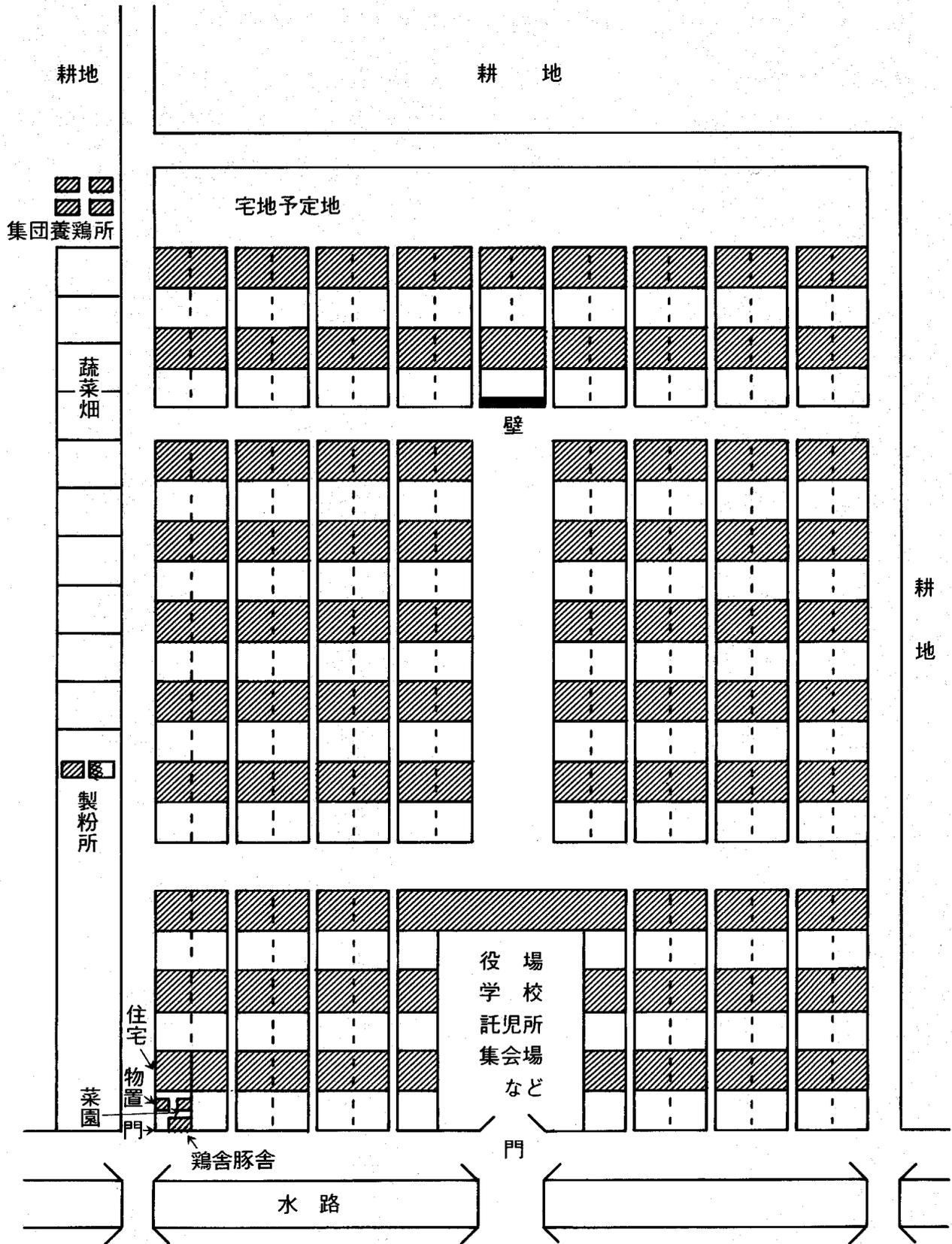
ている。第2に養鶏については天津畜牧連合公司との契約で、技術、飼料供給、製品の納入面で強く同公司と結びつけられている。これまた、自らの力で下から独自に発展したものではない。いわば突出した二部門は内発的というよりも外から要請された商品化部門であり、地域における分業の展開、商品市場、生産財市場の発展なしにおこないうるのである。その意味ではこの部門で自由な競争、投資意欲といったものは期待しにくい。

逆に消費財の購入ではめざましいものがある。まず住宅建設については79年からの5年間で45戸、間数は4.6である(第30表)。住宅建設は全村規模で統一的に実施中であり、各戸の事情に応じて順番に建設される。統一計画の内容では、まず、敷地は統一的に区画され、面積は同一である。住宅の様式は2種類で、5部屋(1戸建築費5,000元)と4部屋(3,000元)の様式があり、建築時期は秋から春の農閑期である。建築資材は各戸自分で準備し、村の建築隊は村が按配する。台所、門、玄関、レンガ塀、いくつかの家具、をつけると10,000元程度にはなるという。新村完成予想図(第1-1図)に示すとおり、住宅はきわめて画一的である。現在の村は新村の横にあり、2-3年のちは全世帯新村に移り、旧村は農地にもどすという。

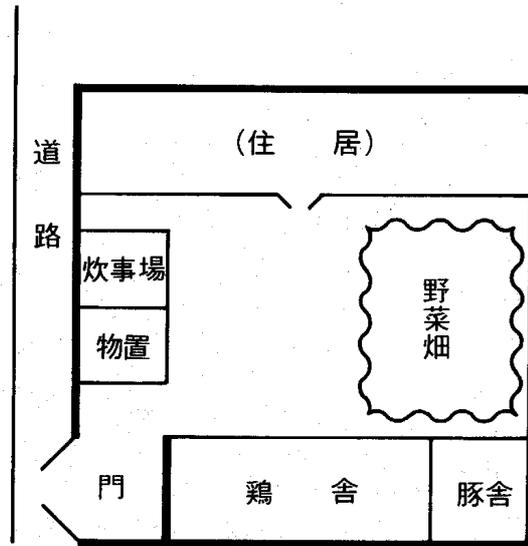
耐久消費財(自転車、ミシンなどは必ずしも消費財とはいえないが)の保有状況をみると第31表の如くである。自転車、テレビ、ミシン、腕時計など多くの品目で全国、全農村のいずれをも大きく上まわって所有している。

第30表 年次別住宅新築戸数・間数別住宅新築戸数

年次	住宅新築戸数	間数別住宅戸数(79~83)	
		間	戸
1979年	7戸	3間	6戸
1980	4	4	9
1981	4	5	25
1982	5	6	5
1983	25	計	205
計	45	1戸平均	4.6



第1-1図 南張村新村完成予想図(役場の壁に書いてあったもの)



第1-2図 参観した1新築農家

これらの財は日常的便益というよりもステイタス・シンボルの性格をもっている。例えば電力供給はネックであり、農村ではしばしば停電する。又水道施設はない。従って家庭用電化製品は十分に利用する条件がないのである。日常生活ではまだまだ娯楽や教育への投資は少ないが、被服費は急速に増大しつつある。従って消費面での現金化が生産的投資の増大に先立って開始されはじめたといえよう。

第31表 耐久消費財所有状況

タンス		腕時計 掛時計		自転車	テレビ	ミシン	洗濯機	扇風機	ステレオ	
2 竿	41戸	1 個・台数	9戸	47戸	10戸	32戸	40戸	4戸	15戸	2戸
3	6	2	35	3	37	3		2		
		3	9	2	12			1		
		4	5	1	5					
総数	102竿		126個	63個	140台	32台	46台	4台	22	2
人口1人 当り所有数 同全国平均	35.5		43.9	22.0	48.8	11.1	16.0	1.4		
			29.1		18.8	4.6	8.4	1.9		
100戸当り 保有数 同全国平均			193.8		215.4	49.3	70.8			
			109.4		74.5	7.2	42.6	4.2	2.2	

〔出所〕 全国については『中国統計年鑑』1985、中国統計出版社

(5)就業状況

就業構成：本調査では他出労働力についての記入がなく、あるのは在宅の労働力についてのみである。非農業労働力は中学教師1，県水利局労働者1，供銷社1であり，その他に2名（教師1，記入不明1）の非農業労働力に分類される可能性のある労働力がある。農業労働力で非農業従事者は商業3（集団2，個人1），大隊建築隊レンガ工2，大隊養鶏場4，大隊運輸隊1，製粉・飼料加工1，電気機具修理1，木工1，運輸業1の計13名である。大隊幹部としては書記1，大隊長1，副大隊長1，会計1，民兵隊長1，共青团支部書記1，婦女連合会主任1の7名である。この他に100羽以上飼育の個人養鶏の主要従事者を副業労働力とすると22人である。合計39（2—非農業労働力に分類される可能性のある者）であり，整・半労働力の21%を占めるにすぎない。このうち個人としては土地からきりはなされているのは非農業人口の3（2）人である。彼らとても家族は土地を分配されている。その他の労働力はすべて土地を分配されており，土地に結びつけられている。就業の場については上記非農業人口の3人は県城であるが，その他はいずれも本村である（うち集団商業は本村が県城に扒鶏店を出したものである）。従って非農業の就業はきわめて限定されており，労働力を農業からひき出す力はきわめて弱い。しかも非農業労働力の賃金は高くない。農民人口に分類される非農業・副業従事者の所得にしても特殊な技術をもった電気機具修理や製粉・飼料加工は高所得を得ているが，その他は高くはない。耕種，養鶏の方が一般に高収入をえている。地域における社会的分業の未展開，「」つきだが労働市場の未展開が本村の世帯の均質性を規定している。

まとめにかえて

本村は70年代末までは食糧一辺倒の自給的農村であった。農業生産責任制の導入と綿作奨励によって，80年代に入り急速に生産が上昇し，生活が豊かになった（その一応の検討は前掲「中国農業の現状と問題—山東省農村調査ノート—」参照）。養鶏と養豚はその基礎の上に普及されている。綿作奨励

過程では多くの優遇措置がとられた。陵県の場合、まず第1に価格政策では全般的価格引上げとともに義務売渡し価格と超過売渡し価格が設定された。陵県のような後進地域では義務売渡し量は少量に設定されたのできわめて大幅な価格引上げになった(この規定は1980年から適用され'85年までは不変とされた)。第2に物資の優遇支給である。超過売渡し綿花1斤につき2斤の食糧が奨励販売された(85年まで不変)。農民は統一販売価格で食糧を購入し、それを超過売渡し価格又は市場価格で国家ないし自由市場で売り渡すことができた。第3は化学肥料の優先的供給である。1斤の綿花売渡しにつき1斤の化学肥料が公定価格で供給された。生産責任制と並んでこれらの優遇措置が綿作を急速に拡大させ、食糧の増産を促したといえる。しかし、この綿作は山東省の場合、多収量品種「魯綿一号」が短繊維で品質上に問題があること、加工能力を上まわるほどに綿花が増産したことによって、85年より大幅な綿作減反政策がとられるに至った。調査時点の84年の11月時点ではすでに綿花過剰が顕在化しており、新たな方向が検討されており、食糧の飼料化による畜産の拡大が有力な一方策として追求されつつあった。本村はこうした方向の先陳をきるものである。綿作にしろ養鶏にしろ地域における自生的な社会的分業の発展、商品経済の展開の基礎の上に導入されたものではない。国家的必要ないし、大都市の需要を保証すべく当地の発展段階をこえて導入されたものである。当地においては自給経済の上に商品生産が継ぎ木されることになった。自給経済と地域労働市場の未展開、郷鎮企業をはじめ工業、商業、サービス業の未展開、したがって自由な生産的投資の場が少なく、圧倒的多数の世帯は土地に緊縛され、そこでの農業経営(耕種業)との補完関係で畜産、林業、その他数少ない非農業をおこなっている。消費面ではテレビ、自転車、ミシンなどの耐久消費財の導入や住宅建設には刮目させるものがあるが、消費生活全般の近代化には距離があるように思われる。

そうした中で村内には所得格差の拡大、経営の分化、多様化が徐々にすすみつつある。

その特徴は食糧・綿花の単純耕種業から養鶏、畜産導入による多角化の動

きである。過剰労働力，過剰資金を利用し，多就業形態をつくり出そうとしている。したがって本村は養鶏專業村といわれてはいるが，当面は耕種業と養鶏とはそれぞれ自立的に分離するのではなく，相互補完的にすすむと考える方が自然である。その理由は養鶏が綿花以上に不安定な市場であること，地域における労働力市場，商品市場の未展開により基本的消費物資の自給生産は不可避であり，又家族経営内部で労働力の合理的燃焼形態を模索しなけ

山東省陵県鄧集郷南張村農家經濟調査総括表

順位	世帯番号	世帯員数	労働力数	うち非農 民人口	農業労働力	うち非農業 副業労働力	総所得	うち耕種業	畜産	養鶏	商業・サ ービス業
1	4	3	1		1	1	9,000	1,500	7,500		
2	57	5	4		4	2	6,550	2,600	250	1,200	
3	2	6	6	(1)	5(4)	1	6,000	2,500	3,500		
4	9	4	2		2	1	5,852	1,300	52		4,500
5	35	6	6		6	3	5,280	2,500	1,580		
6	59	6	5		5	2	4,950	3,200	580	450	
7	64	6	4	(1)	3(2)	1	4,886	2,300	420	1,500	
8	19	5	3		3	1	4,750	3,000	600	1,150	
9	23	5	5		5	1	4,360	1,810		1,800	
10	32	4	2		2		4,250	3,500	750		
11	63	6	4		4	1	4,130	3,250	360	520	
12	28	5	5		5	2	4,115	2,125	380	890	
13	53	5	4		4		3,950	3,500	450		
14	10	6	6		6	1	3,870	3,100	250		520
15	60	6	5		5	2	3,805	1,795	210	1,800	
16	15	5	2		2	1	3,800	3,000	300		
17	3	6	4		4	1	3,750	2,700	450		600
18	6	4	3	1	2	1	3,746	2,000		1,200	
19	31	3	1		1	1	3,600	1,850	250	1,500	
20	1	6	5		5	1	3,500	2,300		1,200	
21	29	6	2		2		3,280	2,900	380		
22	51	3	2		2	1	3,140	1,350	450	340	
23	39	6	5		5		3,087	2,900	187		
24	26	5	4		4		3,045	2,570	475		
25	58	3	2		2	1	3,030	1,700	380	950	
26	25	5	3		3		3,020	2,500	520		
27	34	4	2		2		3,001	2,400	601		
28	30	5	2		2	1	3,000	2,500	500		
29	8	6	3		3	1	2,980	2,210	530		
30	52	6	3		3		2,930	2,390	540		
31	55	6	3		3	1	2,875	1,950	275		
32	43	4	3		3		2,800	2,450	350		

山東省陵県鄧集郷南張村農家經濟調査總括表(つづき)

順位	世帯番号	世帯員数	労働力数	うち非農 民人口	農業労働力	うち非農業 副業労働力	総所得	うち耕種業	畜産	養鶏	商業・サ ービス業
33	56	4	2		2		2,772	1,652	270		
34	7	4	2		2	1	2,770	1,780	150	840	
35	61	4	2		2		2,770	2,540	230		
36	50	6	4		4		2,641	2,150	491		
37	17	6	3		3		2,603	2,350	253		
38	16	7	5	1	4		2,580	1,850	190		
39	22	6	6		6		2,547	2,002	545		
40	13	5	2		2		2,473	2,303	170		
41	38	3	2		2	1	2,450	1,200	300	950	
42	48	2	2		2		2,355	2,070	285		
43	33	2	1		1	1	2,210	950	510	750	
44	47	5	3		3	1	2,210	1,650		560	
45	5	5	2		2		2,178	1,980	198		
46	21	5	5		5	1	2,125	1,970	105	1,050	
47	11	4	2		2		2,080	1,600	480		
48	12	6	4		4	1	2,050	1,200			
49	37	2	2		2		2,000	1,500	500		
50	20	3	2		2		1,970	1,700	270		
51	54	2	2		2	1	1,950	1,950			
52	62	3	2		2		1,950	1,950			
53	40	3	1		1		1,870	1,300	570		
54	18	3	2		2		1,828	1,650	178		
55	24	6	4		4		1,825	1,650	175		
56	46	4	4		4		1,757	1,560	197		
57	42	4	3		3		1,745	1,550	195		
58	45	4	3	1	2		1,665.4	920	185.4		
59	27	3	2		2		1,650	1,185	465		
60	36	3	1		1		1,500	1,200	300		
61	14	2	0		0		1,380	860	520		
62	41	3	2		2		1,345	1,150	195		
63	49	2	0		0		965	780	185		
64	44	2	0		0		880	635	245		
65	65	1	0		0		450	400	50		
	合計	287	188	3(2)	185(183)	36	195,786.4	128,837	18,897.4	31,230	5,620
	平均 (1戸当り)	4.4	2.9			(総所得)	100.0	65.8	9.6	16.0	2.9

[注] 1)労働力数とは中国でいう整半労働力の合計で男子16~60才、女子16~55才の世帯員をさす。
 2)非農業労働力で()のあるものは非農業人口であるか否か記入のないものをさす。
 3)畜産と養鶏の純収入で分類が不明のものは養鶏として計算した。

工(加工)業	賃金収入	その他	非耕種業内容, ()従事者数	世帯員1人 当り所得	1労働力 当り所得	耕種業所得 / 総所得	その他所得
		林業850		693	1,385	59.6	850
			個人養鶏(1)	693	1,385	64.3	990
				683	1,365	89.7	230
				440	660	81.4	491
				436	871	89.9	263
	540		水利局従業者(1)	369	516	72.6	730
				425	425	78.6	545
				495	1,237	73.1	170
			個人養鶏(1)大隊民兵隊長	817	1,225	49.6	1,250
				1,178	1,178	87.9	285
			個人養鶏(1)	1,105	2,210	43.0	1,260
			個人養鶏(1)	442	733	74.7	560
				524	1,084	71.3	188
			個人養鶏(1)	425	425	4.9	2,020
				520	1,040	76.9	480
	850		集団商業労働者(1)	342	513	58.5	850
				1,000	1,000	75.0	500
				657	985	86.3	270
			集団の繰り綿場請負	972	975	100.0	0
				650	975	100.0	0
				623	623	69.5	570
				609	914	90.3	278
				304	456	90.4	175
				439	439	88.8	197
				411	548	94.2	95
	560		集団商業労働者(1)	416	555	55.2	745.4
				550	825	71.8	465
				500	1,500	80.0	300
				630	460	62.3	520
				448	678	84.9	195
				483	—	80.8	185
				440	—	72.2	245
				450	—	88.9	50
3,150	5,802	2,340					
1.6	3.0	1.2		682.2	1,057.4	65.8	(合計) 66,949.4